

## 化人形

以前私が扱った化人形といふ面白い話がある。或時私の友人が来ての話に、「化ける人形があつて困つてゐるから解決して貰ひたい。」と言ふのである。私も好奇心に駆られ兎も角行く事にした。

其当時私は東京に住み靈的研究熱に燃えてゐた時なので、早速友人と同行して赴いた。所は深川の某所で、其家の二階の一室に通された。見ると正面に等身大の阿亀の人形が立つてゐる。実に見事な作で余程の名人が作ったものらしい。年代は徳川中期らしく十二単衣を着、片手に中啓を翳した舞姿である。家人の話では、

「連日夜中の、世間が寝静つた頃になると、中啓の骨の間から二タニタと笑ふ顔が透けて見えるかと思ふと歩き始め、其家の主人の寝所に来、腹の上に馬乗りになつて首を締めるのである。其様な訳で転々と持主が代る。」——といふ様な話を聞き私の興味は頂点に達した。早速阿亀の前に端座冥目にして祝詞を奏上し神助を乞ひ、人形に憑依せる靈が自分に憑依するよう祈願した。すると忽ち私に憑

依したらしく、急に私は悲哀感に襲はれ落涙しそうである。直ちに其家を辞し家に帰り、翌朝例のM夫人を招いた。直ちに昨夜より私に憑依せる人形の靈に

『前に居る婦人に憑り、化ける理由や目的を語れ』と言ったので、早速靈は靈媒に憑依した。その語る処は左の如きものである。

「自分は約四十年前、京都の某女郎屋の女郎であつたが、その家の主人と恋仲となり、それが妻女に知れた為、大いに立腹した妻女は自分を虐め始めた。それだけならいいが、終には当の主人までが自分に対し迫害をするようになったので、口惜しさの余り投身自殺したのである。人形は客から貰ったもので、非常に愛玩してゐたので、一旦地獄で修業をしてゐたが我慢し切れず、怨みを晴そうとして地獄から抜け出し以前の女郎屋へ行ってみると、主人夫婦は既に死亡してゐたので、その怨恨を晴らす由もなく、其代りとして縁も由縁りもない人形の持主になる主人を苦しみ怨みを晴そうとした。」——と言ふのである。之は現界人が聞くと不思議に思ふが、

常識からいえば怨みを晴すべき相手が居なければそれで諦めるべきで、他人に怨みを持って行くといふ事は理屈に合はない話だが、此様に靈の性格は現界人と異ふ事を、私は屢々経験したのである。といふのは靈が一旦何等かに執着心を起すと、それを思ひ反す事がなく、一本調子に進む癖がある。話は続く、

「自分の本名は荒井サクといひ、生前京都の妻恋稻荷の熱心な信者であつたが、自分は怨みを晴すに就て狐の助力を懇請した処、その稻荷の弟狐とその情婦である女狐との二狐靈が協力する事を誓ひ、援助する事になったので、人形の化けたのは右の狐靈の仕業である事が判つた。」

いつも荒井サクの靈が憑る前、M夫人の眼には見えるのである。夫人が、

「今サクさんが来ましたよ」といふので、

『どんな姿か?』と質くと、

「鼈甲の簪を沢山頭に挿し、うちかけを着て隣へ座りました。」といふ。又斯ういふ事もあった。私は霊友に右の話をした処「自分も一度霊査してみたい」と言ふので、十人位の人を集め心霊研究会のような会をした。其時右の友人がM夫人に対し霊査法を行いながら、侮辱するような事を言つたので狐霊は立腹し、曰く、『ヘン馬鹿にしなさんな、これでも妾は元京都の祇園で何々屋の何子といった売れっ子の姐さんでしたからね、其時の妾の粹な姿をお目にかけよう。』と言ひ乍ら、いきなり立つて襟をとり、娜を作りながら座敷中彼方此方と歩くのである。私は『モウよい、解つたから座りなさい』と言つて座らせ、覚醒さした。M夫人に質けば「何にも知らなかった」と言ふ。覚醒するや私に対して「今茲に狐が二匹居りますが、先生に見えますか。」といふので私は、『見えないが、どんな狐か?』と訊くと、「一方は黄色で一方は白で本当の狐位の大きさで、此処に座つてゐる。」というかと思うと、「アレ狐は今人形の中へ入りました。」といふので、『人形の何処か』と訊くと、

「腹の中央にキチンと座って、此方を見て笑つてゐる。」と言ふのである。私は実に靈の作用なるものは不思議極まるものと熟々思つた。

それから私は、狐靈とサクの靈とを分離し狐靈は古巢へ歸らせ、サクを極樂へ救ふべく努力し遂に成功したのであるが、其期間中の参考になる点をかいてみよう。或時M夫人を前にして、私は小声で、『サクさん、御憑りを願ひます。』といふとM夫人は合掌した手がピリリツと慄えたが、之は靈の憑依した印である。種々の問答の後覚醒するやM夫人曰く、「サクさんが今日來た時は襦袢を着、龍甲の簪を沢山髪に飾り、花魁姿でよく見えた。」といふのである。又斯ういふ事があつた。私がサクと問答をしてゐると言葉が野卑になり態度も異ふので、

『誰か』と訊くと『自分は狐だ』といふ。私は『お前は用がないから引込んで、サクさんを入れ替れ。』と言ふと、今度はサクの靈になるといふ具合で、人間と狐と交互に憑依するのである。そう斯う

するうち狐は「京都へかへる」と言ひ出し、狐の要求を快く満してやったので、終に満足して帰った。サクの霊は私の家の仏壇に祀り、今でもそのまま祀つてある。斯くして化人形問題は解決したのである。

次に前項広吉の霊が憑いて病氣になった娘は一旦は快くなつたが、一年位経て畢に死亡したのであつた。死後一ヶ月位経つた時不思議な事が起つた。それは右の娘の兄に当る者で非常な大酒呑みがあつたが、或一日部屋に座してゐると、数尺先に朦朧として紫の煙の如きものが徐々として下降するのが見えた。するとその紫雲の上に人間の如きものが立つてゐる。よく見ると死んだ妹が十二単衣の如きものを着し、美々しき装ひをなし、その崇高き風貌は絵に書いた天人の如くである。と思ふかとみれば娘は口を開き、「私は兄さんに酒を廃めて貰ひたい事を御願ひに来た。」と言ふのである。語り終るや徐々として上昇し消えたといふ事である。其様な事が其後一回あり、次いで三回目の時であつた。其時は例の如く紫雲が下降し、

その上に朱塗の階が見え、その橋を静かに渡って来た妹は、「今日は最後に禁酒を奨める為に来たので、神様の御許しは今回限りである。」と言ひ、それ限りそういう事はなかった。

此兄は、平常から信仰心などは更になく、勿論靈的知識などは皆無といふ人物であつたから、潜在意識などありよう筈はないから、確実性があり、靈的資料として大いに価値があると思ふのである。

因みに右の娘は全く天国に救はれたのは勿論で、私は信仰生活に入つて間もない頃であつたから、年若き肺病の娘などを単時日に天国へ救ふ事が出来たといふ事実に対し、神の恩恵の厚きに感謝したのである。